＜＜東北魂＞＞を鼓舞する
電子新聞

発行所　株式会社遊無有
〒 207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

無料　第141号　毎月発行

発行 2024 年（令和 6 年）2 月 16 日　金曜日

2 0 2 4 年（ 令 和 6 年 ）2 月 16 日　金 曜 日

【当新聞発行責任者兼編集長兼記者紹介】

【砂越　豊】

宮城県生まれ、70 歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3 作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の大崎上映会は延期。とはいえ新型コロナ禍を乗り越えて４作目制作に向けて奮闘中。趣味は古代史・縄文文化研究。埋もれた歴史を発掘することと東北から日本を変えることを標榜。

いまこそ能登半島へ呼びかける！

東日本大震災を経験した東北と連携せよ！
復旧にも復興にも的確なアドバイスができる

マスメディアから能登地震関連ニュースが激減

いま、この国では、政治スキャンダル、芸能人不倫、スポーツ選手等のスキャンダルが民放テレビやネットを中心としたマスメディアに氾濫している。

視聴率重視のニュース編成、視聴率さえ上がれば何でもいいという最近のトレンドにあきれつつ、ニュースとはこうしたものを指すのだったかとあきらめにも似た気持ちが湧いてくる。

その一方で、はっきり言うが、ＮＨＫを除けば、先月の元旦に発生した能登地震のその後のニュースは激減している。

こうした状況を、能登半島の被災地や被災者の方々はどういう思いで眺めているのだろうかと思うといたたまれない。

ただでさえ、被災後の日々の暮らしに窮しているというのに、自分たちには関係ないニュースで沸き立っているように見えるこの国をよそ眼に見ながら、さらなる孤立感に苦しんでいることだろう。

そういえばあの時も、メディアって何だろうと強烈に思ったことを思い出す。

３・11発生直後、撮影終了後黙って過ぎ去ったヘリコプター報道クルー

もう少しで発生満十三年になる東日本大震災。

あの大震災発生直後の、マスメディアの被災地報道の一コマをいまでも忘れることができない。

津波によって海水に取り囲まれた建物の屋上で必死に助けを求める被災者たちの上空をヘリコプターで飛び回りながら、被災者の様子を撮影していたのだが、撮影が終わったら、何のメッセージを発することもなく黙って飛び去っていったマスメディアクルーがいた。

明らかに、被災者を手助けしようという気配はまったく見えなかった。

撮影して、テレビニュースに流すだけが仕事であり、被災者はただの報道の対象でしかないと語っていた。

あの助けを求めていた被災者たちがその後どうなったのかは報道されなかった。

あれがすべてとは言わないが、マスメディアの「本音」の一端がものの見事に理解されたのだが、今回もあれと同じなのだとつくづく思うのだ。

何度もしつこいが、一局だけを除いて。

なぜ活かせないのか？東日本大震災の経験とノウハウ

マスメディアだけではない。政府もまことに不甲斐ない。

今年の元旦に発生した能登半島地震災害対応については、あの東日本大震災の経験を踏まえた対策や、それに学んださまざまなノウハウがきちんと整理され、政府内に保管され、即座に活かされているだろうと当然のように考えていた。

すなわち、東北被災地を中心にした被災各地の記録

輪島市では大規模火災発生・・・毎日新聞より

東日本大震災時の気仙沼大火災・・・ｊｉｊｉ.ｃｏｍより

能登町では津波で多くの建物が損壊・・・AERA dot より

東日本大震災時の津波で倒れた女川の建物・・・日経XTECH より

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

から導き出された必要な対策がきちんとまとめられ、整理され、そこから国の大災害対策として、次に大災害が発生した際には迅速かつ有効な対策が打てるようにまとめ上げられ、今回もすぐに発動するものとばかり思っていたのだ。

まずは、地震で破壊された建物、津波で破壊された建物、火災によって燃えた建物、それらから出た大量のガレキの撤去がある。ガレキの撤去なしでは被災地は身動きが取れない。

救助もできず、ご遺体も探せない、ガレキが放置されたままでは基本的に危ない。

そして、被災地からの緊急避難ルートとしての道路確保、被災地外部からの復興支援のための車両通行のための道路整備。それがなければ、被災者の生命存続に関わる。

住む家を失うか、または地震で倒壊寸前になった住居に住めない被災者のための避難所の確保。そして仮住居の建設も不可避で、緊急に対応すべき課題である。被災者の水や食料の確保は時間との勝負である。

ケガ人や病人への対応も待ったなしである。

緊急の資金援助も不可欠である。被災地といえどもお金がない状態では暮らせない。

それらは、ニュースを見る限りでは、政府や被災自治体の対応は後手後手に回っているように見えた。遅すぎるとしか見えない。

いったい、なぜなんだろうと考えこんでしまった。

たった十二年で、あの東日本大震災の経験を忘れてしまったとでもいうのだろうか？まったく理解不能である。

困窮する被災者たち

東日本大震災の発生は三月十一日だったが、被災地は雪の舞う天候だった。

今度の能登半島地震は、冬真っただ中の元旦の発生。

そうした環境のなかで、水や食料確保がむずかしいのは当然で、なかには調達が非常にきびしい場所があったようだ。

道路が寸断されていて、飲料水供給車両が通れない場所ではどうやって水を確保したのだろう？

食料については、地震発生からかなり時間が経ってから、やっと、一個のおにぎりに出会えて感激していた被災者がテレビに出ていた。

避難所が満杯だったのか、倒壊リスクのある我が家の玄関先で夜間を過ごしたという夫婦もいた。

避難所ではなく、自家用車で何日も寝ていたという被災者もいた。寒いので、ヒーターを稼働しっ放しで、少ないガソリンを気にしながらの避難生活。

避難所に行かずに、野菜栽培用のビニールハウスを改良して「仮住まい」にしていたケースも見た。

詳しく報道されていないので、実際の現場は知りえないが、スピーディーな政府対応ができていないことは容易に想像できる。

いかに頼りない政府といえども、ここまで無為無策とはあきれ果てる。

「半島」という地理的ハンディが復旧の足かせ

東日本大震災以後に、ずっと取り残されていた場所があった。

それは、宮城県の牡鹿半島だった。

太平洋に突き出た大きな半島で、能登半島ほどではないが、大きな半島である。

そこは、道路での入口は一本しかなく、その道路が遮断されると、残るルートは海ルートしかなくなる場所で、能登半島と条件が似ている。

そして、震災後、この牡鹿半島を取材で「突端」まで行ったが、復旧・復興工事からずっと取り残されていた。

震災発生後のままとまでは言わないが、ほぼそれに近い状態だった。

能登半島がそうならないように祈るのみである。

能登半島と東北は連携せよ！

筆者は、東北被災地と能登半島は場所は離れているが、今後の震災対応では似ていく部分が多いと感じる。

それだからこそ、あえて大胆に提言したい。

能登半島は東北被災地と強力に連携すべきである！

ある意味で、東北被災地は「先達」と言える。そうした「先達」からの励ましは、単なる部外者の励ましではない。

また、「先達」からのアドバイスは、単なるアドバイスではない。多くの犠牲を払ったうえで得た、苦難とこのうえない悲しみを包含したアドバイスである。

何よりも心強い味方となるにちがいない。

もう国には任せない、任せられない

巨大災害が起きた後の、復旧、そして復興には大変な時間と労力と、資金が必要となる。

さらに住民コンセンサスを形成していくプロセスも苦労が多いだろう。

東日本大震災からの復興作業では、不要と思われるような工事も存在した。

国をまったく頼らない復興はないとは思うが、それだけに頼り切っていると、あとで後悔しないともかぎらない。

いや、むしろ、資金面以外はできる限り頼らない方がよさそうだ。

東日本大震災からの復興作業を振り返ると強くそう思える。

大震災からの復興への道のりはとにかく長い。そして、被災地が主導権を握って復興をリードしていかなければならないのだ。

この点でも、東北被災地が能登半島復興を間接的にリードしていくのが望ましいと考える。

遠隔地連携復興を模索せよ！

それと、能登半島と東北被災地は離れているので、現実の連携はむずかしいと思われるかもしれないが、今の時代にはさまざまなツールを用いれば、物理的な距離など瞬間的に飛び越えられる。

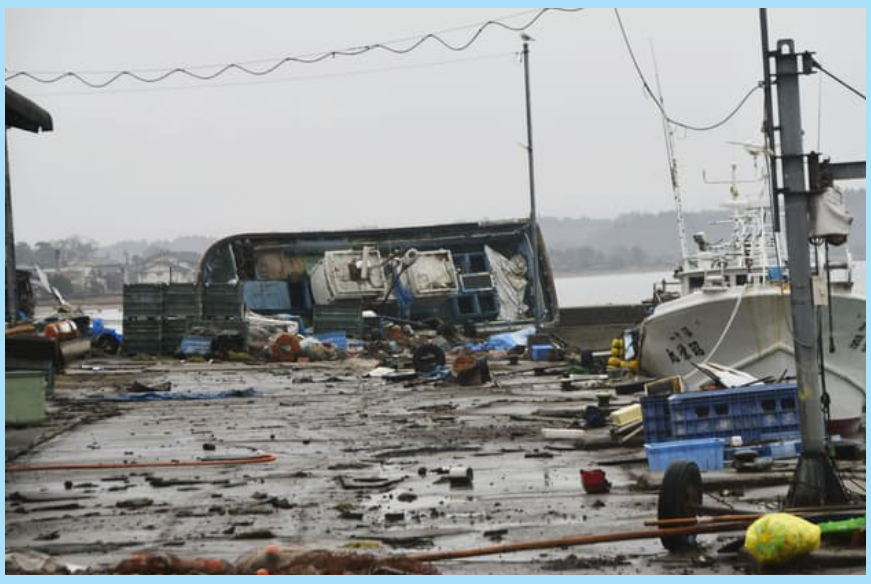
それよりも、一番の課題は「相互の信頼」だと思う。

非営利の災害復興事業を民間で立ち上げよ！

現状から見ると復興は非常に困難と思えるだろうが、むしろ、こうした事をチャンスととらえ、震災前を回復する復興ではなく、時代を先取りするような強靭な発想力をフルに発揮して、普通の復興以上のことを成し遂げたらいいと考える。

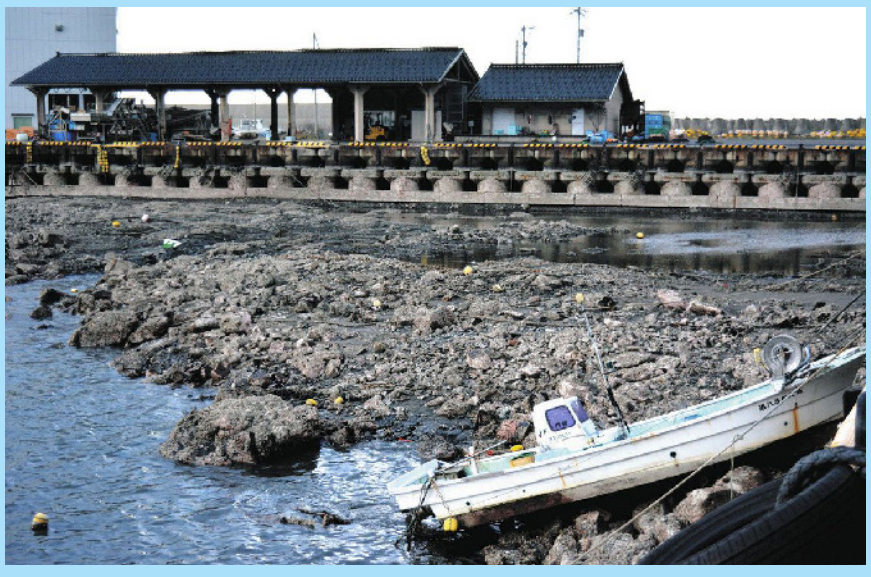
この日本列島は巨大な自然災害が頻発する列島である。だから、そうした不幸な経験をむしろ逆に活かすような「新事業」を、能登半島と東北とで産み出していければよいとまで思うのだ。

そうした「新事業」は、必ず活かせる。それを民間主体で創造していくのである。



津波で打ち上げられた船（珠洲市）・・・日経新聞より

東日本大震災時の津波で街まで流された船・・・宮城秀晃氏撮影



岸壁が4m隆起した輪島・・・中日新聞より

東日本大震災地震で地盤沈下した結果、大潮時には浸水（石巻市）・・・ｊｉｊｉ．ｃｏｍより

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

新シリーズ開始　『東北再興への道』②

東北観光のキャチコピーは「東北一万六千年の歴史」

新シリーズ「東北再興は可能か、の続編」開始

新年号で、「東北再興の実現は可能か」という記事を巻頭に書いた。しかし、一回だけでは何か物足りないとの思いが募ってきた。

それで、いろいろと思いをめぐらせた結果、もっと深く掘り下げることにした。シリーズ開始記事として、「東北再興のキーワードは東北一万六千年の歴史」として、いろいろ雑多なことを書き連ねた。

ただし、内容は、東北への思い入れが強すぎての多少過激な要素も含んでいることをまえもってお伝えしておきたい。

「奈良」が一瞬で嫌いになったある出来事

それは数年前の出来事だった。あまり思い出したくもない出来事でもあった。

筆者はもともと日本の古代史が大好きで、特に奈良が好きだった。一年の半分は奈良で暮らしても良いとさえ思っていたくらいに好きな場所だった。

しかし、ある出来事を境に、奈良や京都が大嫌いになってしまった。この国で最も行きたくない場所になってしまった。

＊

数年前に奈良に旅行に行った。筆者は行く先々で、土地の日本酒を味わうのを趣味としている。

その時の奈良旅行の時も、奈良の日本酒が飲める店を探してとあるお店に入ったのだった。

あれこれと観光名所の話をしていたが、ある有名な歴史的作品について、同席していた筆者のカミさんが、その作品の一部は好きになれないと店のオーナーに告げた途端に、猛烈な「反撃」をしてきたのだ。

そして、ついに発してはいけないワードを口走ったのだった。

いわく、「これだから“東もん”は、言葉使いも知らず、遠慮することも知らないで、ダメなんだ」と。

「“東もん”」？？最初は何のことだか分からなかった。少し冷静になって考えてみてようやく分かった。

奈良や京都の人たちから見たら、関東や関東以北に住む人たちはすべて「“東もん”（東もの）」なのだ。

それは、自分たちは、千三百年の歴史がある古都に暮らす文化と伝統ある地域の高尚な人々であり、明治維新で遷都したとはいえ、関東や関東以北に住む人たちは、歴史も浅く、洗練された文化もない野蛮な地域の住民だとさげすむ言葉だったのだ。

そのさげすみのワードを、怒りにまかせて口走ってしまったということなのだ。

このワードで、筆者の奈良好きは一瞬で吹き飛んだ。

加えて、何という時代錯誤の中で生きているのかとあきれ果てた。

明治の遷都がよほど悔しかったのかは分かるが、そこから差別的な考え方に至るとはあきれる。現代の日本でこんな古臭い考え方に縛られた人がいることをそのとき初めて知ったのだ。

「千三百年の古都」も大嫌いになってしまった

奈良や京都の観光のうたい文句は「千三百年の歴史」であるが、この一件を境に嫌いになってしまった。

JRなどの観光戦略にも使われたワードであり、頻繁にテレビにも登場した。

奈良はもちろん、京都の人たちも、「超」がつくほど「京都好き」で、現在の京都観光の礎を築いたのは、この「京都愛」であることはあまり知られていない。

海外からの観光客の多くがなぜ京都に行くか、ついでに奈良に行くか？

それは、京都出身の海外在住者でつくる「県人会」ならぬ「府人会」が、ボランティアで、海外各地の大使館に押し寄せ、ボランティアで「京都のPR」をしてきたためであるといっても過言ではないと、京都在住者から聞いたことがある。

郷土愛の極致ともいうべきレベルである。他の都道府県にはなかなかマネできない。

それはそれで結構なことである。ただ、その一方で「“東もん”（東もの）」は言ってもいけないし、思ってもいけないことだ。

「千三百年の歴史」は不自由な時代

よくよく考えてみたら、「日本の千三百年の歴史」とは、日本が中央集権国家となって、律令体制による身分制導入で、それまで自由だった人々を縛りつけ、人々の自由を奪い、さらには「税」という「庶民の富の巻き上げ」を開始した時代であり、縄文以来の文化を抹殺することが始まった時代でもある。

そんな時代の何が良いのかと、あの事件以来、発想の方向が逆転してしまった。

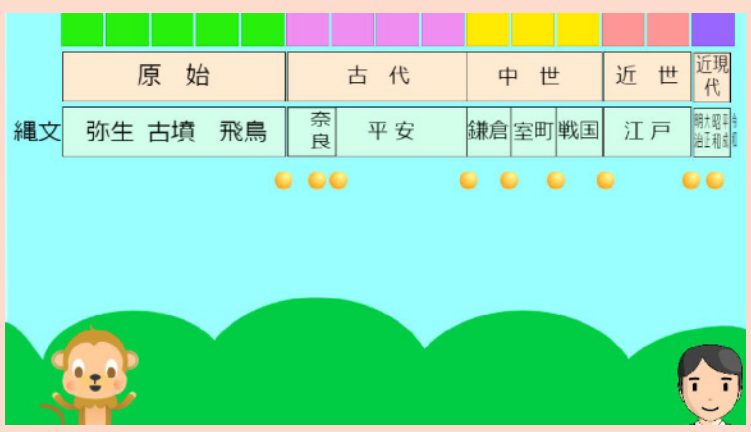
そうだ、かえって、この国の伸び伸びした空気をせせこましい空気に変え、権力による収奪を当然のように行ない始めた時代ではないかと、さらに「発展」していった。

そして、そのことによる弊害もあると気づいた。

それは、あたかも日本の歴史がわずか千三百年しかなく、奈良や京都が都であった時代以前には、まるで国家としての日本が存在

奈良千三百年の歴史を PR するポスター・・・日本旅行より

好きだったんだけどなあー『石舞台』　筆者撮影



こうした年表が大半だから歴史イメージが崩れていく・・・縄文時代は枠外？・・・カネッチ ＷＥＢ教材クリエーターより

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

していなかったかのようである。あったのは、野蛮で現代の日本人の系譜を外れた「原住民」が暮らす原始日本のようなイメージ操作にもつながると筆者には思えてきたのだった。

日本には千三百年以上の古い歴史がある！なにせ1万6千年の歴史だ！

翻って東北の歴史を考えてみると、東北の歴史はとても古い。

歴史的にも有名で、最も古い東北の年代といえば、一万六千年前から始まる縄文時代である。

その歴史的証拠は、青森県の大平山元遺跡で発掘された、日本最古であり、世界最古の土器である。その土器は、縄文時代の始まりを証明する発掘物でもある。

奈良や京都には申し訳ないが、千三百年と一万六千年とは比較の対象にさえならない。

東北の長い歴史に比べたら、奈良や京都は「たかが千三百年前からの新参者」ともいえる。それなのに、千三百年の古都とは片腹痛し、である。

東北には古い歴史のある街がいっぱいある

古い歴史を持つのは、青森の土器だけではない。

四千年とか五千年の歴史が証明されているまちや遺跡もたくさんある。

筆者の郷里などは、いまはすっかりさびれているが、実に七千年の歴史がある場所である。

そうした遺跡が東北には埋もれたままたくさん存在しているのである。

考古学的な発掘も、どうしても西側に偏っているため、東北の遺跡は埋もれたままなのである。

時の政権が東北の富を奪取する戦いを仕掛けてきた千二百年前

このように、東北には非常に古い歴史があったのだが、いまから約千二百年前に、状況が一変した。

中央集権国家として軍事力を強化していった時の朝廷が、「東北の富」を奪いにきたのだ。

その時の戦争が、あまり知られてはいないが、「三十八年戦争」であり、日本の戦争では最も長い戦争であった。

活躍したのが、少数精鋭のアテルイ率いるエミシ軍。

しかし、もともと平和なエミシたちも、三十八年という長い戦争に孤軍奮闘の果てに降伏した。

それで、ますます「東北の富」が収奪され続けたのだった。人間も強制的に移住させられたのである。

そうした「収奪」とさげすみはずっと続いて今に至るのである。

こうした歴史は東北でもっと教えていくべきであると筆者は考える。

ついでに、歴代の武士の元締めを「征夷大将軍」というが、「征夷」とはエミシを討つということである。

逆に言えば、時の権力は常に東北を恐れていたということでもある。

だから、徹底して東北をイジメる。収奪して、二度と立ち上がれないようにする。

そうしたことを歴代の権力は続けてきたのである。

もう外国人も奈良京都観光には飽きてきた

観光の話に転じるが、最近の外国人の観光に大きな異変が生じている。

外国人による観光といえば「京都・奈良」が定番だったが、驚くべきことに、青森や盛岡が人気スポットになっているのである。

一応は「京都・奈良」も見てみるが、リピーター観光は、これまで行ったことがない場所として、青森や盛岡に注目が集まっているというのだ。

東北にとってはまことに喜ばしいことである。

この勢いに乗じて、東北各地で積極的に観光PRをすれば、海外から注目を集めることができるだろう。

課題は、京都出身者のような郷土愛が不足していることだろうか？

東北観光キャッチは「一万六千年の歴史」！

そうしたことで、「東北再興」の第一歩としての観光事業のキャッチコピーは「東北一万六千年の歴史」にしてはどうだろうか？

最初に抵抗するのは、まさか東北の住人ではないかと秘かに恐れてはいるが・・・

この点は、少しだけ京都人を見習おうではないか。

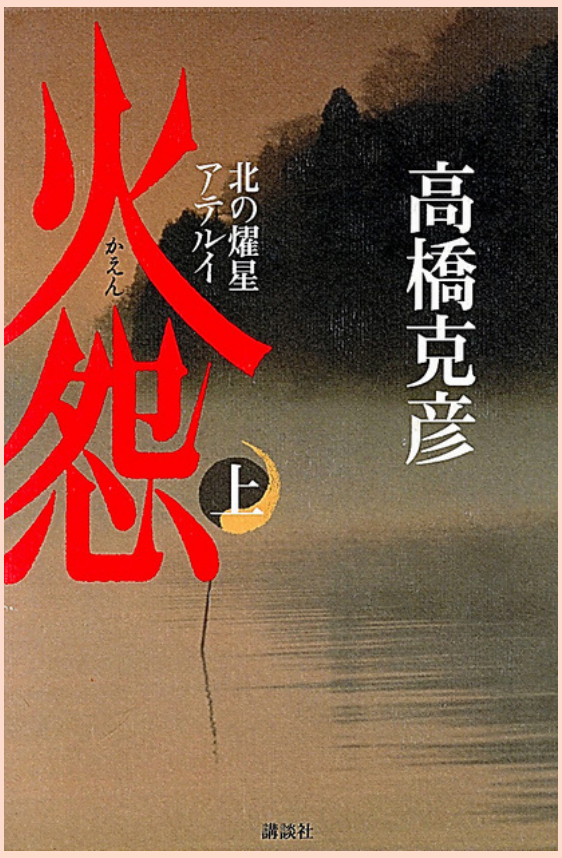
そして、千二百年間、いじめられ続けた見返しをしようではないか。

そのためにも、東北の埋もれた歴史を掘り起こせ！

そして、長年眠り続けてきたプライドを取り戻そうではないか！東北の同胞諸氏よ！

世界最古と言われている縄文土器破片・・・青森・大平山元遺跡出土・・・ユネスコより

『東北の富』は時の権力に奪われていった歴史を映像化①・・・筆者制作映像より



『38年戦争』を取り上げた小説家・高橋克彦氏の『火怨』

『東北の富』は時の権力に奪われていった歴史を映像化②・筆者制作映像より

東北のさびれたまちにも7000年の歴史がある！・・・筆者制作映像より

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

東北の観光の現状を知る
～まず自分たちが知ることから

誇るべき東北のホスピタリティ

株式会社リクルートの観光に関する調査・研究・地域振興機関「じゃらんリサーチセンター」は、様々な調査研究結果を公表しているが、その中に「じゃらん宿泊旅行調査」がある。毎年七月前後に公表されており、一九回目となる二〇二三年度版も昨年七月一三日に公表されている。

この「じゃらん宿泊旅行調査二〇二三」は、「旅行市場動向編」と「都道府県魅力度ランキング編」に分かれているが、このうち「都道府県魅力度ランキング編」では、全国一万五五七二人の宿泊旅行者を対象に調査した都道府県の「総合満足度」や「地元ならではのおいしい食べ物が多かったランキング」、「魅力のある特産品や土産物が多かったランキング」など、様々な項目について、都道府県のランク付けを行っている。

ランキング結果をざっと紹介してみると、「総合満足度」は大分県、鹿児島県、北海道がベスト三だが、四位に岩手県がランクインしている。「地元ならではのおいしい食べ物が多かった」は石川県、北海道、富山県がベスト三だが、四位に宮城県が、七位に山形県が、一〇位に岩手県がランクインしている。「魅力ある特産品や土産物が多かった」は北海道、沖縄県、石川県がベスト三だが、やはり四位に宮城県、そして九位に秋田県がランクインしている。「魅力的な宿泊施設が多かった」は大分県、沖縄県、群馬県がベスト三だが、七位に山形県がランクインしている。

私が注目したのは、「地元の人のホスピタリティを感じた」のランキングである。沖縄県、鹿児島県、北海道・富山県がベスト三だが、何とここには、五位に秋田県、八位に山形県、九位に岩手県、一〇位に福島県と、東北が四県もランクインしているのである。ベスト一〇の中に同じ地方の県が四つもランクインしているのは東北だけである。ここに東北の観光における強みが見て取れるのではないかと思う。

そして、恐らく東北のどの県にも言えると思うのだが、そうした観光客にとって印象に残った地元の人のホスピタリティというのは、行政や観光協会から言われてやっているのでは、恐らくない。皆それぞれにはるばる足を運んで来てくれた観光客に感謝して、自分でできる範囲のホスピタリティを発揮しているということが、同じ東北にいると容易に想像できる。

こうした強みを大々的にアピールするのは難しいし、またことさらに強調することでもない気もする。それでも、こうした来た人を温かくもてなす気持ちが自然に浸透していること自体は、大いに誇りに思ってよいと思う。

一方で課題も見える。「子供が楽しめるスポットや施設・体験が多かった」、「若者が楽しめるスポットや施設・体験が多かった」、「大人が楽しめるスポットや施設・体験が多かった」、「ご当地ならではの体験・アクティビティが楽しめた」の各ランキングについては、ベスト一〇の中に、東北の県はどこもランクインしていないのである。これらのことから、東北の観光においては、エンターテイメント関連の要素や体験型の要素が弱いことが窺える。自然の良さを実感できるスポットや歴史を感じさせる建造物・遺跡、地元ならではの美味しい食べ物、ゆっくり寛げる温泉などについては他地域に引けを取らないと思われるが、そこから一歩進んで体験して楽しんでもらう要素をどう組み込んでいくかが今後問われる部分であろう。

ちなみに、「参考」として「選んだ理由別都道府県ランキング」も紹介されている。その中では、「良い宿・ホテルがあったから」の六位に福島県が、七位に山形県がランクインしている。また、「魅力的な温泉があったから」でも三位に山形県、五位に福島県がランクインしており、施設や温泉の魅力がこの両県については認識されていることが分かる。

満足度の高い温泉が多い東北

温泉に関して言えば、同じじゃらんリサーチセンターの「じゃらん人気温泉地ランキング二〇二四」が昨年十二月一一日に公表されている。これは旅行サイト「じゃらんｎｅｔ」の会員一万六一〇七人を対象にアンケート調査を実施したもので、こちらも今回で一八回目と継続して行われている調査である。

この中で、「全国あこがれの温泉地ランキング（まだ行ったことはないが『一度は行ってみたい』温泉地）」では、一位に秋田の乳頭温泉郷、三位に山形の銀山温泉が堂々ランクインしている。乳頭温泉郷は「おすすめしたい穴場温泉地ランキング（これまでに行ったことがある温泉地のうち『おすすめしたい穴場温泉地』の推奨率）」でも一位になっており、まさに乳頭温泉郷の持つ「秘湯」のイメージ通りの結果になっている。

「全国人気温泉地ランキング（これまでに行ったことのある温泉地のうち『もう一度行ってみたい』温泉地）」のベスト一〇内には残念ながら東北の温泉はランクインしていないが、東北居住者に限って見ると、一位が宮城の秋保温泉、二位が乳頭温泉郷、三位が銀山温泉、四位が岩手の花巻温泉郷となっており、東北の中でも乳頭温泉郷や銀山温泉の人気が高いことが分かる。一位の秋保温泉については、仙台を訪れた際にちょっと足を延ばせば行けるという気軽さが評価されたのだろう。

人気とは別に満足度を見るとまた違った結果が見えてくる。「全国温泉地満足度ランキング総合部門（年間訪問者一〇〇人以上）」の全国一位は福島の高湯温泉で、満足度は実に九四・四パーセントの高さである。他に東北では、乳頭温泉郷が六位（九二・九パーセント）にランクインしている。青森の奥入瀬渓流温泉・十和田湖畔温泉、同じ青森の八甲田温泉・酸ケ湯温泉なども満足度が九〇パーセントを超えている。

もう一つ、「全国温泉地満足度ランキング秘湯部門（五〇人以上一〇〇人未満）」では（調査で宿泊者数がこの人数だっただけの温泉地を「秘湯」と呼ぶのもどうかとは思うが…）、三位に山形のあつみ温泉（九四・五パーセント）、八位に同じく山形の肘折温泉（九三・三パーセント）がランクインしている。

先に挙げた「おすすめしたい穴場温泉地ランキング」でも、一位の乳頭温泉郷の他、五位に肘折温泉、七位に高湯温泉、八位に青森の下風呂・薬研温泉、一〇位に八甲田温泉・酸ケ湯温泉、一二位に銀山温泉、一四位に福島の中ノ沢温泉、一七位に岩手の夏油高原温泉郷、二一位に秋田の小安峡温泉・秋の宮温泉と、東北の温泉が多くランクインしている。この結果は、「穴場」というくらいであるから他の地方の温泉に比べて知名度では劣るものの、大いにおすすめしたい温泉が東北にはたくさんあるということの現れなのだろう。

複数の魅力がある地域の満足度が高い

温泉以外のデータもある。昨年六月二六日に公表された、旅行情報誌「じゃらん」が約六二〇〇人に調査した「人気観光地満足度ランキング二〇二三」によると、東北の観光地の満足度ランキングは、一位が秋保、二位が青森の津軽西海岸（五能線・深浦・鰺ケ沢など）、三位が花巻、四位が山形の山形蔵王、五位が福島の裏磐梯（五色沼・磐梯高原）という順位であった。

これらの結果もなるほどと思わせられることも多い。一位の秋保は先ほど挙げた秋保温泉という温泉の魅力のみならず、最近個性的なカフェや工房などが相次いでオープンしている。震災でゼロになってしまった宮城のワイナリーが二〇一五年に「秋保ワイナリー」としてでき、今年はアメリカからやってきたクラフトビールブルワリー「グレートデーンブリューイング」も開業し、大いに賑わっている。こうした様々な要素が解け合って、地域の面白さとして認知されているものと思われる。

二位の津軽西海岸も、全国屈指の風光明媚なローカル線であるＪＲ五能線の魅力を始め、世界遺産の白神山地、黄金崎不老ふ死温泉、十二湖などやはり多彩な魅力がある。三位の花巻も、先ほどの花巻温泉郷の個性的で多種多様な温泉以外にも、宮沢賢治の故郷としてのコンテンツが充実している他、街中にあるマルカンビル大食堂の人気も極めて高い。

こうして見てみると、複数の魅力が組み合わされた地域の満足度が高い傾向にあることが分かる。これは単に観光としての魅力だけでなく、まちづくり、地域づくりの観点からも重要である。結局のところ、その地に住む人にとって魅力的でない地域が、よそから来る人にとっては魅力的ということはほぼあり得ないからである。

東北の人は東北を旅行しない

さて、最後にもう一つの調査結果を紹介したい。再び「じゃらんリサーチセンター」によるもので、全国六四八二人に調査して昨年一二月一九日に公表された「国内宿泊旅行ニーズ調査二〇二三～二〇二四冬調査報告書」である。

私がまず注目したのは、「主な行き先（居住地別）」である。東北に居住する「旅行意向者」の行き先のトップは東京（一八・九パーセント）で、東北のどの県よりも高率であった。東北の中では宮城がトップ（一〇・八パーセント）で、以下福島（六・八パーセント）、岩手（六・一パーセント）と続くが、山形は三・四パーセント、秋田は二・〇パーセント、青森に至っては〇・七パーセントと、東北に住む人は旅行先としてほとんど同じ東北を選んでいないということが浮き彫りになっているのである。北海道に居住する旅行意向者の行き先のトップが、圧倒的に同じ北海道（四一・九パーセント）であるのとはまさに対照的である。東北のあちこちを楽しく巡っている私からすると、実にもったいない話である。東北の人にこそ、もっと自分たちの住む東北の魅力を知ってもらいたいと切に願う。

もう一つ興味深いのは、「旅行目的（行き先別）」である。行き先として東北を選んだ全国の旅行意向者の旅行目的で最も多いのは「温泉や露天風呂」（四七・九パーセント）で、次いで「地元のおいしいものを食べる」（四二・六パーセント）、「宿でのんびり過ごす」（三七・二パーセント）となっている。この傾向は他の地域と比較してみると、概ね北海道や北陸と同じだが、北海道より多いものとしては他に「名所・旧跡の観光」（一四・九パーセント）がある。

東北に旅行に来る人のお目当ては、まさにこうしたことなのであり、東北にはそれに応えられる観光資源があるわけである。まずはそのことを他でもない東北にいる我々こそがもう一度認識しておきたい。他の地域を旅行するのもよいが、もっと近くに旅行先としてとても優れている地域があることを声を大にして伝えたいものである。

執筆者紹介

大友浩平
（おおともこうへい）
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagma5/

Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

世界の注目は「祭じまい」の輝きか？
東北少数精鋭民族　明日の戦い方の事

『イリオス』という新しい漫画作品がある。ギリシャ神話におけるトロイア戦争をモチーフとして、九州を拠点とする、そして東京を拠点とする両暴力団の全面戦争を描くという物騒ながらユニークなもので、神話の人物名がヤ○ザたちの名に当てはめられ（アガメムノン→崇目宗男、という具合）たりと、鮮烈な暴力描写の一方時にファンタジックに、笑いやサプライズも絶妙に織り交ぜ描くかつてない作品となっている。さすがは「修羅の国」と揶揄された福岡県擁する九州からの発想だな―と変に感心してしまうが、無論東北にも○クザがいない訳ではないにしても一般的に西日本と比べ暴力や裏社会的な物事を好まず、むしろひた隠しにしようとする傾向の強い東北には、彼らを主人公に据えるなどとてもマネのできる発想ではない。

だがこれは確かにヤク○同士の抗争の形を取りながらも、実際の九州と東京を対比させた寓話であり、何となれば東京相手だろうがいつでも対等に渡り合うぞという地方からの挑戦的表現に他ならないようにも感じられるのである。

漫画家は熊本県出身・在住の円城寺真己で、前作は熊本を舞台としたクライム・サスペンスの秀作だったが、強い地域愛とこだわりが高じてか、本作の舞台視野は熊本に止まらず九州全体を巻き込んだものへと発展しているのも興味深い。

社会構造の裏事情までつぶさに把握し巧みにファンタジー世界観に織り込んでリアリティを演出する九州流の物語手腕には、違う手法で中央への脅威となり得る北海道を描き出した『ゴールデンカムイ』に対する西国・九州なりの回答たる凄みを感じざるを得ない。

このような大胆不敵な芸術面での対中央表現は、近年の東北ではあまり見られなくなったように思う。おそらくかつては高橋克彦の『炎立つ』を始めとする蝦夷（えみし）関連の小説作品や赤坂憲雄の東北学運動が先鋭的な中央への問いかけであり挑戦でもあったが二〇一七年の山浦玄嗣（はるつぐ）による小説『ホルケウ英雄伝』あたりを最後に、蝦夷というワードが中央を揺さぶるような形で使われる事は滅多に見られなくなった気がするのである。先頃の福島第一原発での汚染水漏れの報道は、あらためて東北の地に打ち込まれたほぼ永久的な負の遺産の存在を思い出させ、近年顕著な人口減少と自治体消滅の未来図などまさにいち早く滅びゆく地方とでも言いたげな情報の波に飲まれてすっかり牙を抜かれた状態の東北には、とても東京・中央に対する闘志など起ころうはずもない―ように思えてしまうのだ。

※

人口減少といえば、西日本の暴力団も昨今は長年の法規制に加え少子高齢化の波も例外なく受け、人材不足に苦しんでいる実態らしいのだが、ここ東北でも最近その象徴的と言える報道があったばかりだ―昨年末岩手県一円で毎二月開催されてきた「蘇民祭」が相次いで今後の開催を断念する旨を発表、花巻市石鳥谷町（いしどりやちょう）・光勝寺の五大尊蘇民祭は今年以降、奥州市水沢・黒石寺（こくせきじ）の黒石寺蘇民祭が来年以降の取り止めとなる事が決まったというのである。

蘇民祭といえば、真冬の夜に下帯姿の半裸の男衆が大勢集まった図がすぐに思い浮かぶ、無病息災・五穀豊穣を祈願する伝統行事である。何でも、黒石寺の祭事は千二百年もの歴史があるとの事だが、当寺の現住職によると、祭事執行の中心的役割を担う人材の高齢化並びに後継者不足の為、関係者一同との協議の上苦渋の決断に至ったとの事である。夜を徹した古式行事を先祖代々引き継いできた地元民が担えなくなれば寺の祭の本来の趣旨から遠ざかってしまう―との事で寺の儀式として護摩祈祷のみ継続していく意向らしい。

ネット上では、海外勤務経験も持つエリートである若い住職の価値観や、集落の因習的問題に原因を探す声もあるが、先祖代々受け継いだ者でなければ意味がないという事であれば、今後の各地の伝統行事の行く末はかなり絶望的ではないだろうか―などと個人的には思えてしまうのだった。

裸祭りといえば、私の住む仙台でも毎一月開催の「どんと祭」での裸参りがあり、一応の大都市における各地元企業もこぞって参加するような規模の大きな行事が廃れる事は当分ないかと思われるが、特に「蘇民祭」のように裸体の男たちが揉みくちゃになって縁起物である「蘇民袋」を奪い合うという内容があまりにも時代錯誤的に受け止められるような側面があるとすれば、それもまた時代の趨勢として衰退の一因になるのではないかとも思える。

「こうした特徴的な祭が観光客や都会へ出ていった人々を引き寄せ、地域活性の大きな役割を負っていたと言えるのではないか」という意見はよく聞かれるが、確かに正論ながら、もはやそれだけでは所謂ジリ貧である事も間違いない。

巷では二〇五〇年の都道府県人口予想ランキングなども多く見かけるが、大抵は東北各県が他地方以上の著しい人口減少、全国で東京都のみが微増という馴染みのパターン。東京にもこの先全く転入者がなければ当然ながら人口は減っていくので、今後も絶え間なく全国から人々が流入すると想定しての予測だろうが飽くまでも「このままでいけば」という事に過ぎない。

予想は聞き入れた―ならばどうするか、が問題だ。

随分前に拙稿にて主張した「仙台に芸術大学を」に則して、東京から一つ著名な芸術系大学を移してきただけで、若者の動向は劇的に変わる可能性がある、と私は今も考えているのだが地方が人を必要とし、東京圏がこれ以上の転入超過を望まないのならば、そのような両者間の示し合わせが可能かも知れない―しかし実際に東京はそれに応じるだろうか？そしてそれは若者らから移住の自由を奪うのではなく、逆に選択の幅を与える策になり得るか？

東北における大都市・仙台の二〇五〇年人口予想はどうかと見れば、百万から九十万へ、と比較的緩やかな減少―これは大都市且つ地方中枢都市である事から来る見立てであり、おそらく現在と同じように宮城県内はもとより東北他県の若者たちの大半は東京圏へ、うち何割かは仙台へ転入という予想と思われる。

確かに、大都市集中が未来の不可避的必然ならば、ある程度仙台一極集中を維持する事で、例えば蘇民祭のような伝統を捨ててきた東北人の心や文化はここで保たれ、どこかで何らかの形での復活を期待できるかも知れない―だが、現状の仙台に東北他県の文化の温床を引き受ける懐の広さ、土壌があるだろうか。

都市は、奪う。ならば都市自身が変容していかなければ―全国から人を集める大都市には、それだけの責任があるとは言えないか？

では、変容する都市とはどんな都市なのだろうか？

ただ、如何にしても失われる文化・習俗はあるだろう―何を捨て去り、何を守り続けるかは、都市で議論されても良いが、あくまでもその地域が決める事だ。

一方で、昨年始め米NYタイムスにて「二〇二三年に訪れるべき五十二ヶ所」の第二位に選ばれた岩手県盛岡市のような例も、忘れてはなるまい。とっくにその魅力を知り、何度も訪れていた私としては「何を今更」の感があったが、たとえ長年その魅力を熟成させていても、それが広く伝わり認知されるには運のようなものも必要らしい。

盛岡を推した同誌の記者はその理由として「街の美しさ・食の素晴らしさ・人々の優しさ」を上げ、自然と向き合う街が訪れる者の心を豊かにする、と語る。

地方の中小規模の街は、どこでもそうなのではないかと思われがちだし、盛岡の人々自身がそう思っていた事だろう。だが、盛岡が特別である事を、気づく者は気づくという事だ。

しかし、海外に注目されているのは盛岡だけではない。今、中国の旅行者たちの間で青森県が非常に人気との事で、SNSでの青森県フォロワー数が東北他県は勿論、大阪や神奈川も十倍前後上回る途方もなさでその背景には中国の人々の北方都市景観への憧憬、東京・京都や北海道まで行き尽くした旅行者たちがネット上で注目されやすい、未だ知られていない土地と文化を求めているという側面もあると言われるが、実際に訪れた人々の満足度は非常に高く彼らは異口同音に答えるのだという―「東京に劣るとは思わない」「離れたばかりなのに青森が恋しくてたまらない」と。

単なる観光地として―？いや、この土地の引力が一過性のものと侮れようか。青森といえば、冒頭の『イリオス』との対比ではないが、弘前市を舞台とした漫画『ふらいんぐうぃっち』では青森は青森で全く違うベクトルから凄い展開になっていたのであった。

拙稿で当作品を紹介したのは実に六年前で、当時はまだ一、二巻しか出版されていなかったが、現在は何と既に十二巻まで出ており絵柄・ストーリーテリングともに大きく進展させながらも当初から変わらぬ、凄い事が起きているのにのほほんとかわしていく作風と弘前出身・在住の漫画家による隔月一回というマイペース連載を崩していない。

魔女修行で地元の横浜から青森県弘前市へ修行生活に出る女子高生が主人公という修行で都会に出る設定で有名な『魔女の宅急便』の逆転発想。修行の進展で魔術の腕を上げるとともに海外の魔女や国際魔女組織との交流も始まり、最近の連載では、何と魔女のオリンピックたる最大規模の世界魔女集会「大サバト」候補地に青森市が上がり、最強候補地・ノルウェーの魔女らの妨害工作を受けながらも主人公たちが青森開催実現の為奔走する様が描かれる。驚くべき事だがもはや『ふらいんぐうぃっち』には東京の二文字がほぼ全く登場せず、つまり大都市は眼中にないのである。

東京と全面戦争などしている場合ではなく、青森が相手にしているのは、既に世界なのだ―これを見ればやはり既存の国境を越えた発想が東北の身上であり、そこにこそ東北の戦い方、方向性が隠れている、と考えて良いのかも知れない。

※

住む人々が脱出していき国内はおろか海外からの来訪者も少ない東北は、心底から「良い」と思う者の少ない「少数派」の国であると私は思ってきた。それならそれで良い、敗北と絶望を糧に開き直って生きようと―だが、世界からの視線が変わり始めた今、更なる未曾有の変化が起きぬとも限らない。それでも、いやなればこそ、私たちは一人一人が郷土を想う少数精鋭民族への道程を怠るまい。

奥羽越現像（おうえつげんぞう）氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かって立ち読みを始める東北好きである。

予想不可なる東北の未来へ
―青森港にて

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

飛沫ツララ

ツララと氷筍

つらら

しぶき氷

四季島

ホオジロ

シリーズ　遠野の自然

「遠野の立春」

遠野１０００景より

もう一か月半も経ったというのに、能登半島の復旧・復興はなかなか進まない。日々の暮らしにも窮している。これでは今後の復興計画もままならないだろう。

あの東日本大震災を経験した東北からは、たくさんのアドバイスを提供できるのにと心から思う。

それにしても国全体で、なぜあの東日本大震災から学ばないのかとも思う。

大災害が起きるたびに、他の大災害の経験を活かせず、ゼロから学び始めるというのはまことに悲しい。

日本列島は大自然の荒々しさと恵みの両方が存在する列島であり、いつも感謝しつつも、身構えて生きるべき場所なのである。

つららの表面

炎

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

写真でお伝えする

東北の風景

「えんぶり」（青森）

写真撮影　尾崎匠

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.